Japanese Literature — 32

現代日本の文学

伊藤　整集

〈監修委員〉
伊藤　整
井上　靖
川端康成
三島由紀夫

〈編集委員〉
足立巻一
奥野健男
尾崎秀樹
北杜夫
（五十音順）

学習研究社

現代日本の文学

32

全50巻
分割払価格　39,000円
現金価格　35,500円

伊藤　整集

昭和45年6月1日　初版発行
昭和48年2月1日　九版発行

著者　伊藤　整

発行者　古岡秀人

発行所　株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4－40－5
郵便番号 145　振替東京142930
電話　東京(720)1111 (大代表)

印刷　大日本印刷株式会社
中央精版印刷株式会社
製本　中央精版印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
製函　日本紙パルプ商事株式会社

＊この本に関するお問合せやミスなどがありましたら，文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145) 学研「ユーザー・サービス本部事務局」現代日本の文学係へ，電話は，東京(03) 720－1111 内線352,353か，東京(03) 727－1600へお願いします。

© 1970 Printed in Japan　0393－164 632－1002

伊藤整文学紀行

小樽高商（現小樽商科大学）

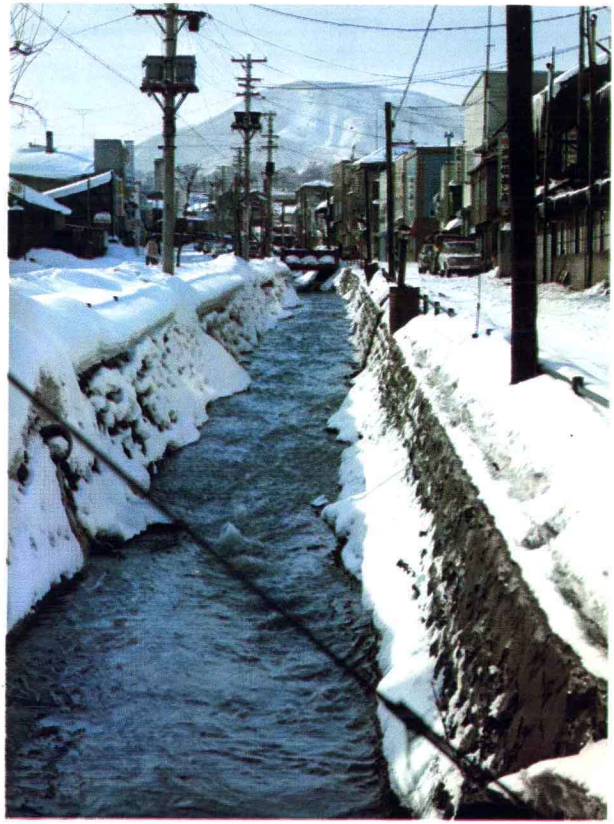
私が自分をもう子供でないと感じ出したのは、小樽市の、港を見下ろす山の中腹にある高等商業学校へ入ってからであった。その学校は、落葉松に蔽われた山の中腹を切り崩して、かなり広い敷地を取って建てられてあった。校舎は薄い緑色に塗った木造の二階建で、遠く海に面していた。

（「若い詩人の肖像」）

夏の輝く日の、秋の汗ばむような山道の思い出を葬う散華(さんげ)のように、小樽の暗い空から、雪が生命のある無数の小動物のように、私たちの上に降ってきた。港の中で、雪のために視界をさえぎられた汽船は、家々の屋根越しに、おそろしく長く引く吠えるような悲鳴に似た汽笛を鳴らした。（「若い詩人の肖像」）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook

花園公園より冬の小樽市街と港を望む

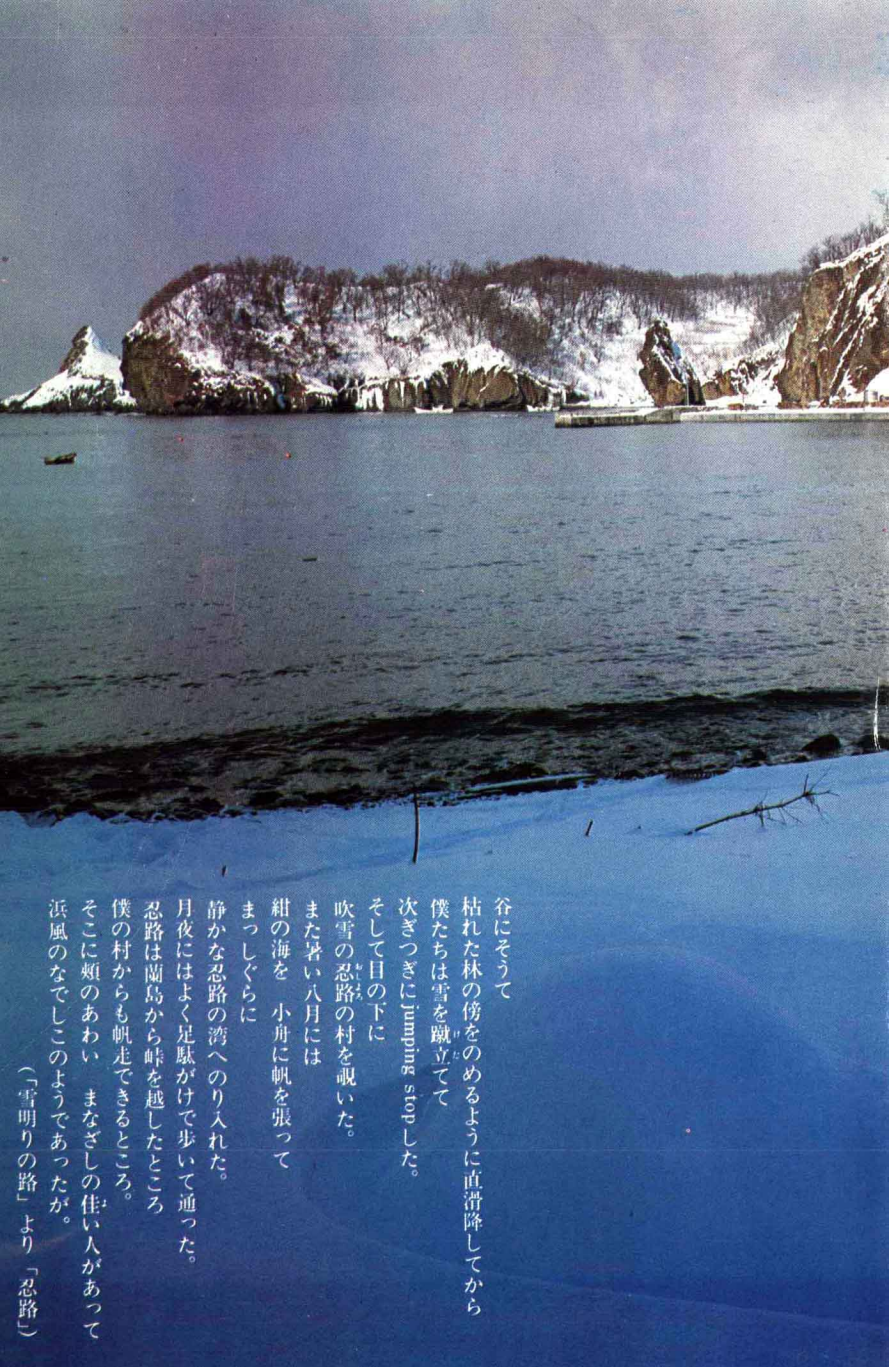


——どうかね、思い出せないかね。ここはおなじみの妙見河畔だぜ。君はまるでリッフィー河畔のレオポルド・ブルウムといったようなうれいふかい顔をしてるじゃないか？　悔恨におしつぶされたる自然人とでもいうべきところだろうか。（「幽鬼の街」）

上　小樽　妙見河畔　後方の山は天狗山

左　整の生地北海道松前郡白神灯台

北海道小樽　忍路湾



谷にそうて
枯れた林の傍をのめるように直滑降してから
僕たちは雪を蹴立てて
次ぎつぎにjumping stopした。
そして目の下に
吹雪の忍路の村を覗いた。
また暑い八月には
紺の海を　小舟に帆を張って
まっしぐらに
静かな忍路の湾へのり入れた。
月夜にはよく足駄がけで歩いて通った。
忍路は蘭島から峠を越したところ
僕の村からも帆走できるところ。
そこに頬のあわい　まなざしの佳い人があって
浜風のなでしこのようであったが。

（「雪明りの路」より「忍路」）

下　秋の函館本線塩谷駅付近　左　旭ヶ丘より小樽港を望む。今は碇泊する汽船も数少ない。

试读结束：需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

帰ろう　古い京都の寺と　塔と　橋と
ひとの美しい　私に気付いていない街から
静かな島々を浮かせる内海から。
いまはただもう帰る心になり。
九月に入れば空気のつめたい国へ　林檎の
　実っている畑へ
心おきない村の仲間へ
ああ汽車に二夜　津軽の海を越えた所に
なつかしい緑の国がひろがっている。

（「雪明りの路」中「京都」）

小樽市塩谷海岸

白足袋の恋人であったなら
どんなに　はげしい思いが燃えても
この湿った林の道では
そうっと　その胸をみださぬように並んで行こうに。
この深い緑には
どんなにその足袋がよく浮くことだろう。
林の道かどに来たら
その口を仰向かせて
どんなにいらだって　目を燃やして
きすしてもやろう。
ああ　此処(ここ)では
なんて澄んだ閑古鳥の声。
蕗かげの　ひとりしずかのような恋人であったなら
閑古鳥の声を
よくその胸にとおらせるために
燃える思いをおさえて
何時までも黙って歩いてやろうに。

（「雪明りの路」中「ひとりしずか」）

右　小樽　手宮公園

小樽市立図書館

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook